

4. 急性リンパ性白血病合併妊娠の一例

(産科婦人科学教室) 糸数 功, 磯 和男, 柳下正人,
鈴木良知, 舟山 仁, 高山雅臣
(八王子医療センター 産婦人科) 野平知良
(内科学第一講座) 田内哲三, 鈴木章孝, 大屋敷一馬
妊娠中に白血病を発症する頻度は1/75000と非常に稀である。今回我々は、妊娠中期に発症したALL合併妊娠の一例を経験したので報告する。症例は19歳、0経妊0経産で、平成8年6月5日～5日間を最終月経として妊娠。平成9年3月下旬から、発熱、食欲不振、全身倦怠感が出現。近医を受診したところ白血球数の異常高値、血小板数の減少が認められ、妊娠30週、急性白血病疑いにて当院入院となった。入院後骨髓生検にて、有核細胞数、リンパ芽球の増加を認め、ALL(L2)と診断した。十分なinformed consentを行い、緊急帝王切開術を施行。1394gの男児をApgar score 4(1)、8(5)で娩出した。新生児の血液所見は異常を認めなかった。母体に対し、術後一日目より化学療法を開始した。母体は寛解、再発を繰り返すも骨髓移植、放射線療法により現在、寛解状態であり、児も発育良好である。

5. 下肢静脈閉塞症が初発症状であった高齢者悪性リンパ腫の一例

(老年病学教室) 小泉純子, 岡田豊博, 木内章裕,
新 弘一, 岩本俊彦, 高崎 優
(外科学第二講座) 矢尾善英, 石丸 新
骨盤腔内腫瘍により下肢静脈還流障害をきたし、下肢の浮腫を初発症状とした悪性リンパ腫の1症例を経験したので報告する。

症例は85才男性。左足の浮腫を主訴に当院を受診した。下肢血管エコー施行したところ大腿静脈の血流を認めず、下肢静脈血栓症が疑われ入院となった。入院後、腹部CT検査で左骨盤腔内に13×10cmの腫瘍を認めた。腫瘍は左総腸骨動静脈を巻き込んで一塊となり、腫瘍の圧迫による静脈閉塞症と診断した。確定診断目的で開腹生検をおこない、non-Hodgkin lymphoma, diffuse large B cell typeと診断した。頸部、腋窩、鼠径部等表在リンパ節は触知しなかったが、胸部CTで縦隔内に腫大したリンパ節を1つ認め、Stage IIIと判定し、CHOP療法を行い、下肢の浮腫の改善、LDH低下を認めた。CTで骨盤内腫瘍の縮小も確認された。その後、T-COOPを2クール施行。現在外来通院中である。

6. 腹部大動脈瘤に合併する消費性凝固障害に対するトラネキサム酸経口投与の効果

(外科学第二講座) 佐々木司, 小櫃由樹生, 矢尾善英,
石丸 新
大動脈瘤では動脈瘤壁の内膜損傷や瘤内血栓形成などにより、消費性凝固障害の状態に陥る場合がある。

【目的】トラネキサム酸内服投与による抗線溶療法の効果を検討する。

【方法】腹部大動脈瘤の待機手術症例を対象とし、トラネキサム酸1500mg/日を経口投与した10例と、非投与10例の血液凝固線溶系の各種パラメーターを解析した。

【結果】各種パラメーターのうち、FDP及びD-ダイマーが、トラネキサム酸投与群において有意に改善した。

【考察】一般にDICに対する抗線溶療法は禁忌であるが、慢性かつ限局性の消費性凝固障害に対しては、投与が容易なトラネキサム酸内服が有効であると考えられる。